四国・水こぼれ話

Water Information Saloon Shikoku

談話室 Vol 34

「ヤツメウナギ」が消えた

高知県　大豊町長
岩﨑（いわさき）　憲郎（けんろう）

川は遊び場

子どもの頃、吉野川でよく遊んだ。特に夏休みとなると、毎日のように川に子どもたちが集まり、時間のたつのも忘れ川遊びに夢中だった。そこで、先輩に泳ぎを習い、潜ることも覚え、同時に鯉釣り、鮎漁、ウナギ漁など、いろいろな川漁の楽しみ方も覚えた。

ヤツメウナギ漁

いろいろな漁があるなかで、ヤツメウナギ漁は6月頃の夜間、急流で川岸に陣取り、カーバイトランプの光を利用し、遡上するヤツメウナギを「ぶったい」という手製の網ですくい捕る、一年で数週間だけのユニークで楽しい漁だった。大人も子どもも昼間から競って場所を取り日の暮れるのを待つ、そして捕ったヤツメウナギは甘辛く煮付ると実に珍味だった。

また、夏休みに、泳ぎの合間に川岸の砂をすくうと、ヤツメウナギが捕れた。小さな稚魚もよく捕れたので、おそらく近くに産卵場所があったのではないだろうか。

このヤツメウナギが、すっかり見えなくなった。代わりにブラックバスがいる。

変わった川

昨年の渇水では、ダム湖底の濁水が流れ、悪臭を放つ濁流となった。川漁は勿論のこと、昔子どもたちの遊ぶ姿を見ない日がなかった川に、今は行く子どもたちもいない。また、一昨年は洪水により、ビニールハウスや工場が浸水するなど、治水機能を持ったダムがありながら、大きな被害が発生した。渇水でも、豪雨でも、直下流の地域では住民が迷惑を被り、将来に大きな不安を抱いて生活している。

ヤツメウナギの住む川

いま、吉野川の河川管理計画の見直しが進められている。そこで提案だが、この計画の目標として、「ヤツメウナギの住む吉野川」はどうだろう。

流域で生活する住民の視点での計画見直しをみんなで考えよう。

大豊町内の高学年児童が参加したカヌー教室

大田口小学校児童による鮎の放流「大きく、元気に育て!!」

吉野川の清流を彩るキシツツジ